

28 グライスの語用論

日常的なコミュニケーションにおいて「自分の言いたいことが適切に伝達できない」、または「相手が何を意図しているのか理解できない」という、ある種のコミュニケーション上の齟齬はよくあることである。伝統的な言語学では、ラング（langue、言語構造や文法体系としての言語）が主要な研究対象とされてきたが、言語はあるコンテクスト（context）内において使用されるものであり、「言い方」次第では誤解を生みかねない。語用論（pragmatics）では言語の情報伝達上の機能とコンテクストを視野に入れ、パロール（parole、実際の言語使用）に焦点をあてた言語運用が研究対象とされる。

語用論研究に大きく寄与したのが、哲学者Herbert Paul Grice（1913–1988）である。コミュニケーションがどのように行われるかを説明する方法として、Grice以前では、メッセージを伝達する際、送信者が情報を符号化（encode）し、受信者はそれを復号化（decode）するというコードモデル（code model）が主流であった。コードモデルでは発話は、文字通りの意味しか示さない。ところが、「このワインは本当に美味しい」と明らかに不満げに言った場合、コンテクスト次第では皮肉とも考えられる。時に発話は、文字通りの意味に加え、含意（implicature）をも伝達する。含意とは発話により伝達された非明示的意味であり、Griceは会話の含意がどのように産出されるかを明らかにしようとした。この点にGriceのアプローチの斬新さがある。

私たちはコンテクストを介して発話の持つ言外の意味をも理解し、コミュニケーションをとっている。Griceは適切なコミュニケーションをとるため、そして時には話者の意図を適切に解釈するためには、参与者がお互いに協調する必要があるとし、協調の原理（cooperative principle）を提案した。協調の原理とは「会話における自分の発話を、それが生ずる時点において、自分が参加している話のやり取りの中で合意されている目的や方向性から要求されるようなものにせよ」というものである。Griceは、この行動原理に従い、順守することで話者の意図は適切に聞き手に伝達されると考えた。

Griceはさらに、協調の原理を支える下位概念として次の会話の原則（conversational maxims）を立てることで協調の原理を具体化した。

- (1) 質（quality）の原則：虚偽であること、十分な証拠がないことは言わない。
- (2) 量（quantity）の原則：当該の会話の目的に必要なだけの情報を伝え、必要な以上の情報を言わない。

- (3) 関連性 (relevance) の原則：関連のあることのみを言う。
- (4) 様態 (manner) の原則：不明瞭、曖昧な表現を避け、簡潔に順序立てて言う。

もちろん、原則は順守することが前提であるが、意図的に違反し、言外の意味を伝えようとする場合もある。これをGriceは故意の違反 (flouting) と呼んでいる。例えば、先に挙げた「このワインは本当に美味しい」という発話も、不味いと思っていながら美味しいと言ったのであれば「質」の原則に違反する。しかし、話し手が欺こうとする意図はないということを聞き手が理解すれば、皮肉を言っているのであろうと考える。

実際の言語使用においては、相手を欺くための「嘘」、修辞的効果を与える「隠喩」のように意図的に「質」の原則に違反する例も多いが、原則の順守が前提となっているため、結果的に話者の意図や言外の意味が適切に伝わる。

Griceは、発話解釈は機械的に行われるものではなく、文字通りの意味や会話の原則を基に意識的な推論 (inference) を通して意図を読み取ることであるとし、推論から話し手の意味に関する最も妥当な説明が結論として得られるととらえ、推論の重要性を明確に指摘した。語用論におけるGriceの功績は、コードモデルに基づいたコミュニケーションモデルの分析に代わり、推論に基づくコミュニケーションモデルを提示したところにある。推論モデルの主な目的は、言語的にも論理的にも可能な複数の解釈の中から、どのように聞き手が、話し手の意図として最も妥当な仮説を認識するのかを説明することである。

発話解釈に伴う推論は、コンテクストに依存するが、言語習慣が異なる人同士、例えば日本語のような高コンテクスト言語使用者と、英語のような低コンテクスト言語使用者とがコミュニケーションする際、そこに誤解が生じる可能性もある。直接的に表現することを避け、曖昧さを残すいわゆる日本型コミュニケーションは、ある意味、会話の原則に違反すると感じられる部分もあるが、日本語における会話の原則に違反しているとは言い切れない。Griceの原理は、確かに言語現象を語用論的に考察する上で理論的基盤となるものではあるが、万人に共通する普遍的な理論であるとは言い難い。

発話解釈には、文の意味に加え、聞き手によるコンテクストに基づく推論が不可欠ということになるが、「発話解釈において、言語形式とコンテクスト的要素とがどのように作用するのか」という点については、次項以降、関連性理論の知見から述べることにする。

(渋沢 優介)